『週刊ポスト』2019.6.10(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第81回 イメチェンの魔術師、作編曲家・川口真の仕事

半世紀前の昭和44年7月に発売された弘田三枝子の『人形の家』(詞・なかにし礼)は、歌の魅力とともに弘田の変身した容姿が話題を呼び大ヒット、弘田はこの曲で同年のレコード大賞歌唱賞を受賞、前年、落選していたNHK紅白歌合戦にも返り咲きました。

『人形の家』を作・編曲した川口真(まこと)は、その4年後の昭和48年、深夜番組『ぎんざナイトナイト』に月替わりで登場した金井克子『他人の関係』、夏木マリ『絹の靴下』、内田あかり『浮世絵の街』で作編曲を担当、一度聞いたら忘れがたい前奏入り編曲で彼女たちのイメージチェンジに貢献しました。

私が初めて「川口真」という活字を目にしたのは、GS絶頂期の昭和43年、大のお気に入りだったテンプターズの新曲を音楽雑誌『ヒットポップス』が楽譜入りで紹介、『エメラルドの伝説』の編曲者名としてその名が記載されていたときでした。

テンプターズの魅力は「オーケストラに頼らない、エレキ楽器とドラムスのみで勝負する初期のビートルズ、ローリング・ストーンズのようなサウンドにある」と信じていた私は、女性ファンを意識した『エメラルドの伝説』から始まるオーケストラ入りのテンプターズ作品からは次第に距離を置くようになりました。

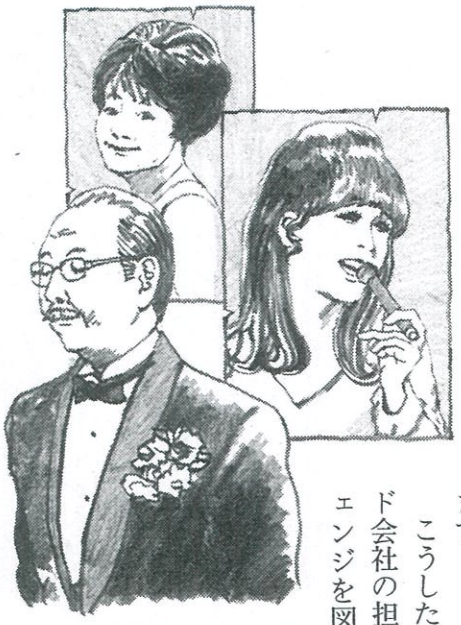
しかし、私の嗜好にかかわらず『エメラルド〜』がオリコン1位に輝き、テンプターズを一流GSへと飛躍させたことを考えると、編曲に当時まだ無名だった川口を抜擢した担当ディレクターには敬意を表したい気持ちです。

川口は東京芸大の作曲科在学中から、いずみたく作品の編曲をしたり、越路吹雪のバックバンドでピアノを弾いていた内藤法美(つねみ)(越路の夫)の代理を務めていたことなどから、やがて大学を中退して音楽業界へ。

昭和41年11月発売の山内賢&和泉雅子『二人の銀座』、昭和42年8月発売の奥村チヨ『北国の青い空』などのベンチャーズ歌謡の編曲で実績を積みます(『二人の銀座』はそもそも越路のためにベンチャーズが書き下ろした曲なので川口との因縁深さを感じます)。やがて作曲にも挑戦、その作曲家デビュー作品が、弘田の音楽人生を変えた『人形の家』でした。

作編曲家として『人形の家』の翌年には由紀さおりに『手紙』を提供、由紀はレコード大賞歌唱賞を受賞し「スキャットシンガー」のイメージから脱却、西郷輝彦には『真夏のあらし』を提供し、それまでの「青春歌謡歌手」のイメージを一新、のちの西城秀樹に連なる絶叫入りアクション歌謡で人気を復活させ、川口自らも同曲でレコ大の作曲賞を受賞します。

こうした経緯を背景に、各レコード会社の担当者が歌手のイメージチェンジを図るとき、「川口真」の3文字が頭に浮かんできたとしても不思議ではないでしょう。歌手の変身復活劇の舞台裏には、プロ野球の再生工場と称された野村監督のような存在がありました。



ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』(グスコー出版)が好評発売中